

「さわる・ふれる」という語の意味に関する ラテン語、フランス語、英語の比較研究

森 田 信 也

A Comparative Study of the Meaning of
tangō in Latin, *toucher* in French, and *touch* in English

Shinya MORITA

This paper, which is based on the analysis of the Holy Bible, examines the ways in which the Latin perfect and imperfect of *tangō* are rendered in Modern French and Modern English from an aspectual point of view.

The results are as follows: in the case of the agent as its subject, that is, its subject being an animate noun, there are 30 past-tense forms of *tangō*, all of which are perfect forms. In this case, the *passé simple* of *toucher* (transitive) in French and the past of *touch* in English respectively correspond to the perfect of *tangō* in Latin. Therefore, it shows an action or an event; in the case of its subject being inanimate matter, there are 9 past-tense forms of *tangō*, (1) four of which are imperfect forms, and (2) the others are perfect forms.

Concerning (1), it is the *imparfait* of *toucher à* (intransitive) in French that corresponds to the imperfect of *tangō* in Latin. Therefore it shows a state of contact. The past of *touch* also shows a state of contact without any action in this case. Therefore, it can be said that the level of transitivity is low.

Concerning (2), it is the *passé composé* of *toucher* (transitive) that corresponds to the perfect of *tangō* in Latin. According to the definitions of *toucher* in *Petit Robert 1*, it shows an action ‘avec mouvement’ on that occasion. Therefore, it can be said that it shows an action. Like this, it is the present perfect of *touch* in English that corresponds to the perfect of *tangō* in Latin. Judging from this, it can be said that the level of transitivity is high.

Keywords: perfect (完了), imperfect (未完了), *passé simple* (単純過去), *passé composé* (複合過去), *imparfait* (半過去), animate (有生の), inanimate (無生の), agent (動作主), transitivity (他動性)

1 はじめに

「さわる・ふれる」という語の意味はいったいどういう事象を指しているのだろうか。あるものに手を伸ばして触れる動作を指す部分とあるものに手を触れて「接触」している状態を指す部分とが考えられるが、これはアスペクトの違いによるものである。また、主語が物か人間かどうかということも関わってくる。本来的には、このアスペクトの相違は時制と関わりが深く、「触れる」という動作の完了の結果「接触している」状態になるわけである。そこで、今回の調査では、ラテン語の動詞 *tangō* の完了形 *tetigi* と未完了形 *tangebam* を聖書からデータを取り⁽¹⁾、そのアスペクトに注目した。つまり、「さわった・ふれた」といった場合、手を伸ばして触ったという動作的な意味を持つのか、また触った結果「接触している」という状態的な意味を持つのかについて、フランス語、英語との比較を通じて、「さわる・ふれる」の意味について考察した⁽²⁾。

2 人間が主語の場合

人が主語になる場合、手を伸ばして「さわる・ふれる」という動作は本人の意志によってコントロールできる動作動詞である。ゆえに、この意味のタイプは Vendler の分類⁽³⁾にしたがえば、dynamic+, telic+, punctual- の accomplishment verb と分類できる。

2-1 *tetig-*の対応関係。

人間が主語になっている場合、ラテン語の過去時制の範疇では全てが完了で、未完了のものは見当らなかった。30例の全てが完了であるが⁽⁴⁾、これは、人が主語の場合は unmarked でこの語が示す事象が「手が物体にふれる」という終結点に注目が置かれているということを示すものである。

Matthew 20: 34

Latin Iēsus tetigit oculōs eōrum.

French Jēsus toucha leurs yeux.

English Jesus, ..., touched their eyes.

これは、イエスがエリコの町から出ると、2人の盲人がイエスに目が見えるようにして欲しいと懇願してきたので、イエスが2人の盲人の目に触れると、目が開いて見えるようになったという場面である。この「触れた」という事象はイエスが「何もしていない状態」から、手を伸ばして、「盲人の目に触れる」までを示しており、動作的である。フランス語では単純過去、英語では過去形が対応している⁽⁵⁾。

DATA:

Genesis 32: 25, Exodus 4: 25, Leviticus 8: 15, 23, 9: 9, Judges 6: 21, I Kings 19: 5, 7, Isaiah 6: 7, Jeremiah 1: 9, Daniel 8: 18, 9: 21, 10: 16, 18, Matthew 8: 3, 15, 9: 20, 27, 17: 7, 20: 34, Mark 5: 27, 30, 31, 7: 33, Luke 5: 13, 7: 14, 8: 44, 45, 46

3 物が主語の場合

物が主語になっているものは9例であったが、そのうち未完了のものが4例、完了のものが5例であった。そこで、未完了と完了の別に分析を試みる。

3-1 *tangēbat* の対応関係

未完了4例はどれも *tangēbat* (未完了過去の3人称単数) であった。

I Kings 6: 27

Latin tangēbat āla una parietem et āla cherub secundi tangēbat parietem alterum. ālae autem alterae in mediā parte templi sē invicem contingēbant.

- French L'aile du premier touchait à l'une des parois, et l'aile du second chérubin touchait à l'autre paroi. Leurs ailes se touchaient au milieu de la maison, aile contre aile.
- English The wing of the one touched the one wall, the wing of other cherub touched the other wall. Their wings touched one another in the midst of the house.

以上は列王記上の第6章のソロモン王の主の神殿建築に関する描写である。ソロモン王がオリーブ材で同形同寸のケルビムを2体作り、神殿の内陣に据え、2体のケルビムはそれぞれ翼を広げ、「一方のケルビムの翼が一方の壁に触れ、もう一方ケルビムの翼ももう一方の壁に触れ、かつそれぞれの内側に向かっている翼は接し合っていた」という様子を描写した部分である⁽⁶⁾。

この場合、フランス語では半過去、つまり、「接していた」という過去の状態を示しており、一方、英語の方は過去形が対応してやはり、「接していた」という状態を示している。アスペクト的には、いつ接したかということは視野に入れない線アスペクトで、いわゆる「状態の過去」を示している。

また、*PETIT ROBERT 1*⁽⁷⁾から主な関係箇所を抜き出すと、

I. Trans. dir.

A Entrer en contact, avec mouvement

1. (Êtres vivants) Entrer en contact avec qqn, qqch.
2. (Choses) Entrer en contact avec (qqn, qqch.) au terme d'un mouvement

B Sans mouvement

1. Se trouver en contact avec

II. Trans. Indir. TOUCHER À...

A Être en contact avec

と定義されており、物が主語になって「触れている・接している」という状態を表すときには自動詞⁽⁸⁾の *toucher à* を用いるということが分かる。

I Kings 6: 27 の2例と II Chronicle 3: 12 のいずれも *toucher à* の半過去になっている。

また、Random House Webster's College Dictionary によれば、

<v. t. 4. to come into contact with; be adjacent to>

という定義が見られ、動作と状態のどちらも示すことができるので、その意味は context による。

DATA:

I Kings 6: 27(×2), II Chronicle 3: 12, Daniel 8: 5

3-2 *tetigit* の対応関係

完了の5例は、どれも *tetigit* (完了3人称単数) であった⁽⁹⁾。

Isaiah 6: 7

Latin ecce tetigit hoc labia tua

French Ceci a touché tes lèvres

English Lo, this hath touched thy lips

Job 4: 5

Latin plaga,---, tetigit te et conturbatus es

French Maintenant que cela te touche, tu te troubles!

English it toucheth thee, and thou art troubled.

ここに掲げた2例はいずれも物が主語で、フランス語の場合にも直接目的語を取っている。つまり、PETIT ROBERT の I-A-2 にあたり、avec mouvement であるから、アスペクト的には動作を示している。この場合、ラテン語の *tetigit* に対して、フランス語では複合過去または現在、英語では現在完了または現在が対応している⁽¹⁰⁾。

DATA:

Job 4: 5, 19: 21, Isaih 6: 7, Daniel 10: 10

3-3 物主語の場合の「さわる・ふれる」の考察

さきほど3-1で物主語の場合、英語の場合はそのアスペクトの相違はコンテキスト次第だと述べたが、ネイティブ・スピーカーの informant⁽¹¹⁾に次のような文の組を見てもらい、相違について尋ねた。

①動作主（つまり人）が主語の場合

I touch the wall.(1)

I am touching the wall.(2)

(1)は動作を示すが、アスペクト的には habitual（習慣相）を示すか、ある特別な文脈では動作を示すかのどちらかだという。むろん、副詞等を伴う方が普通で、(1)のままでは普通は発話されないということであった。一方、(2)は a state of contact「接触状態」を示し、動作は伴わないという。

②物が主語の場合

Their country touches the sea on the south.(3)

*Their country is touching the sea on the south.(4)

(3)は「状態」を示すが、進行形の(4)はこの場合、非文であるとのことであった。例えばこれは、「カーテンが接触している」という場合の継続状態を示す事象が、ある区間では真を示しても、接触していない別の区間では偽を示し、人の手または風の力によってコントロールされて、ついたり離れたりするものであるのに対し、(3)の場合には、偽である区間そのものが存在し得ない。これは人間の力や自然の力ではコントロールできないものだからである。しかし、

Your sleeve touches the soup.(5)

Your sleeve is touching the soup.(6)

という組においては、(5)は「動作」を示し、(6)の方は「状態」を示すという。これについては、(Your sleeve

--- touch --- the soup) というような事象においては、文そのものには現われない動作主の力かはたらく場合、現在形と進行形とが可能で、通常、「状態」を示す場合には進行形にするということであった。

そこで、このことに関しては、「他動性」ということを考慮に入れなければならない。つまり、Their country の the sea に対する働きかけ、運動量はほとんどゼロといってよく、一方、それに比べて Your sleeve の the soup への働きかけと運動量は大きいといえる。さて、ここで 3-1、3-2 で挙げた例にこれをあてはめて考えてみると、Your sleeve --- には必ずその背景に、動作主の存在を想起できるが、一方の Their country --- にはその存在を想起し得ない。ゆえに、(3)に相当するのが、3-1 で、「他動性」はきわめて低く、フランス語でも他動詞が直接目的語を取る形式による表現とはなっておらず、これは「他動性」の低さを反映したものといえる。一方、(5)と(6)に相当するのが 3-2 で、こちらは「他動性」が高く、フランス語でも他動詞が直接目的語を取るという表現になっている。そしてアスペクト的に異なった同形の touched は、アスペクトと「他動性」の差異から、また主語に置かれたものの差異から意味の違いを認識できる。

4 *contingō* との対比

ラテン語の聖書の中の14例のうち、主節・物主語・過去の条件をみたすものは次に掲げる2箇所であった。

I Kings 6: 27

Latin	<i>tangēbat</i> āla una parietem et āla cherub secundī <i>tangēbat</i> parietem alterum. ālae autem alterae in mediā parte templī sē invicem <i>contingēbant</i>
French	L'aile du premier <i>touchait</i> à l'une des parois, et l'aile du second chérubin <i>touchait</i> à l'autre paroi ; et leurs ailes <i>se touchaient</i> au milieu de la maison, aile contre aile.
English	The wing of the one <i>touched</i> the one wall, and the wing of the other cherub <i>touched</i> the other wall ; and their wings <i>touched one another</i> in the midst of the house.

II Chronicle 3: 12

Latin	similiter cherub alterius āla quīque habēbat cubitōs et <i>tangēbat</i> parietem et āla eius altera quīque cubitōrum ālam cherub alterius <i>contingēbat</i> .
French	L'aile du second chérubin, longue de cinq coudées, <i>touchait</i> à la paroi de la maison, et l'autre aile, longue de cinq coudées, <i>rejoignait</i> l'aile du premier chérubin.
English	And of this cherub, one wing, of five cubits, <i>touched</i> the wall of the house, and the other wing, also of five cubits, <i>was joined</i> to the wing of the first cherub. ⁽¹²⁾

ラテン語の *contingō* は *tangō* の派生語で、意味は同じである⁽¹³⁾。語源的には *con* + *tangō* で、*con* (> *cum*) は動詞の派生語を作り、以下の機能を持つ。

Latin *com-*, archaic form of the preposition *cum* 'with', used in compounds with the meanings :

1. together, in combination or union ;
2. altogether, completely.⁽¹⁴⁾

したがって、ここでは *contingō* は「合体」の観念と「強意」と両方の意味を持ち、2体のケルビムの翼

が互いに触れ合ってくっついていてという「状態」を示している。一つ一つについていう場合と二つの物を視野に入れていう場合との対比が *tangō* と *contingō* の違いとなっているといえる。

5 結 論

過去を含む時制のなかでは、「さわる・ふれる」を意味する事象は、ラテン語、フランス語、英語の全において人が主語の場合は「動作」を示すことが分かる。一方、物が主語の場合、テンスとアスペクトの組み合わせによって「動作」か「状態」かを区別している。つまり、その事象が「動作」的な捉え方をされる場合、ラテン語では完了、フランス語では複合過去（または現在）、英語では現在完了（または現在）になっており、かつ「他動性」が高い。一方、「状態」的な捉え方をされる場合、ラテン語では未完了、フランス語では自動詞で半過去、英語では過去となっているが、「他動性」がきわめて低いということが分かった。これをまとめると以下ようになる。

言 語	主語	目 的 語	テンス	アスペクト	他動性
ラ テ ン 語	人	対 格	完 了	動 作	+
	物	対 格	完 了	動 作	+
	物	対 格	未完了	状 態	—
フ ラ ン ス 語	人	直接目的語	単純過去	動 作	+
	物	直接目的語	複合過去	動 作	+
	物	自動詞+前置詞	半過去	状 態	—
英 語	人	直接目的語	過 去	動 作	+
	物	直接目的語	現在完了	動 作	+
	物	直接目的語	過 去	状 態	—

註

- (1) 本稿では考察の対象を主節だけに限った。
- (2) 本稿では、Text として *biblia sacra --- iuxta vulgatam versionem I, II* (Deutsche Bibelgesellschaft 1985) をラテン語テキストに、*La sainte bible* (Alliance biblique universelle 1981) をフランス語テキストに、*The Holy Bible --- King James Version* (New American Library 1974) を英語テキストに採用した。
- (3) Vendler 1967 では、現象のタイプを 4 つに分けている。
State: know, like などの状態を表し、動的でないもの。
Activity: run, walk などの持続性があり、かつ動的なもの。
Accomplishment: make a chair などのように持続性があり、かつ動的で、同時にそれ以上は先に進めない動作の終結点（限界性）があるもの。
Achievement: reach the summit などのように動的で、限界性があり、かつ持続性がない瞬間的に事象が成立するもの。
この分類に従えば、人が主語になった場合の英語の touch は accomplishment verb といえる。
- (4) Micah 1:9 では「ふれる」という意味ではなく、「～に至る」という意味で、この場合、achievement verb に分類される。瞬間で事が終わる事象が完了のテンス・アスペクトを持つとき、完了の結果の現在の状態を示すことが多い。実際にここでは、フランス語は *atteint*、英語では *is come* という形が対応している。しかし、「さわる・ふれる」という意味ではないので、実際のデータとしては 29 例である。
- (5) フランス語では、Mark 5:30, Luke 8:45, 46 の 3 例と英語では、Luke 8:46 の 1 例がイエス自身が話者になっている関係で、フランス語は複合過去に、また英語では現在完了になっている。
- (6) 4 例のうち、Daniel 8:5 はフランス語の対応部分が infinitive になっているが、英語の対応部分は状態を描写した過去形になっている。ただし、II Chronicle 3:12 は英語は分詞の形が対応しているが、もちろん状態

を示している。

- (7) この辞書を参照した理由は、共時的な意味においてより細かな定義を情報として得ることが目的ではなく、むしろ必要にして最小限のアスペクト的な情報を得るためである。同様に英語もジーニアス英和辞典と Random House Webster's College Dictionary を参照したのは同じ理由である。
- (8) 文法的には自動詞とは言わずに、間接他動詞と呼ぶ場合もある。
- (9) Hosea 4:2 は比喩的な意味で用いられている tetigit であるから、考察の対象から除外した。
- (10) Jeremiah 4:18 は副詞節のゆえに考察の対象から除外した。また、Daniel 10:10 は ecce manus tetigit me の ecce は interjection であるが、英語の see+目的語+infinitive と see+目的語+現在分詞の構文の相違に似ている。むろん、ecce は interjection であるから syntax 上の関連は全くないが、「見よ～を」という文脈では、～にあたる accomplishment verb や achievement verb はアスペクト的には perfective である。したがって、フランス語では単純過去、英語では過去形が対応しているが、これは、それぞれ、maintenant que と Lo の有無と無関係とは思われない。
- (11) informant にはアメリカ人のネイティブ・スピーカーをお願いしたが、今回協力していただいたのは、山梨県国際交流員の Kevin Cancerallo 氏と中央学院大学講師の Richard F. Pursley 氏である。
- (12) 英語訳は欽定訳版が分詞構文になっており、対比の意味で、*The Holy Bible --- Revised Standard Version* (Thomas Nelson and Sons LTD) 5th edition, 1952 から引用した。
- (13) Ernout et Meillet *Dictionnaire étymologique de la langue latine* p. 676
- (14) T. F. Hoad *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology* p. 85

参考文献

- 池上嘉彦 『「する」と「なる」の言語学』 大修館 1987
- 小倉博行 「他動性について」 早稲田大学大学院フランス文学語学研究誌刊行会 フランス文学語学研究 第11号 1992
- 金田一春彦 「日本語動詞のアスペクト」 むぎ書房 1976
- 高津春繁 「印欧語比較文法」 岩波書店 1954
- 中右 実 「テンス・アスペクトの比較」 国広哲弥編『文法』日英較講座 2:101-155 大修館書店 1980
- 前島儀一郎 「英仏比較文法」 大学書林 1960
- 「英独仏・古典語比較文法」 大学書林 1983
- 町田 健 「日本語の時制とアスペクト」 アルク 1989
- 森田信也 「Aspect と Nasal Infix に関する試論」 早稲田大学英語学会 Lingua 12号 1990
- 「Perfect と Aspect に関する試論」 早稲田大学英語学会 Lingua 14号 1992
- Anttila, Raimo: *Historical and Comparative Linguistics*. John Benjamins Publishing Company, 1989
- Binnick, Robert, I: *Time and the Verb*. Oxford University Press 1991
- Comrie, Bernard: *Aspect*. Cambridge University Press, 1989 [山田小枝訳 『アスペクト』 むぎ書房 1988]
- *Tense*. Cambridge University Press, 1985
- Ernout, A et Meillet, A: *Morphologie historique du latin*. Klincksieck, 1974
- Fleischman, Suzanne: *The Future in Thought and Language*. Cambridge University Press, 1982
- Freidin, Robert(ed.): *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. The MIT Press, 1991
- Guillaume, Gustave: *Temps et verbe*. Champion, 1929
- Haudry Jean: *L'indo-européen*. Que sais-je? 1984
- Hock, Hans Henrich: *Principles of Historical Linguistics*. Mouton de Gruyter, 1991
- Joos, Martin: *The English Verb*. University of Wisconsin Press, 1964
- Lehmann, W. P.: *Historical Linguistics*. Routledge, 1992
- *Proto-Indo European Syntax*. University of Texas Press, 1974
- Meillet, A.: *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. University of Alabama Press, 1964
- *Linguistique historique et linguistique générale tome II*. Klincksieck, 1952

————— *The Comparative Method in Historical Linguistics*. Champion, 1970 (Translated from the French by Ford, Gordon. B.)

Ogden, C. K. and Richards, I. A. : *The Meaning of Meaning*. Routledge, 1972

Palmer, L. R. : *The Latin Language*. Bristol Classical Press, 1954

Pinkster, Harm : *Latin Syntax and Semantics*. Routledge, 1990

辞 書

Ernout, A. et Meillet, A. : *Dictionnaire étymologique de la langue latine*. Klincksieck, 1974

Gaffiot, F. : *Dictionnaire latin-français*. Hachette, 1934

Hoad, T. F. : *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*. Clarendon Press, 1986

Pokorony, Julius : *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I. II*. Franke Verlag Bern und Stuttgart, 1989

Watkins, Calvert(ed.) : *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Houghton Mifflin Company, 1985

Walde, A und Hoffmann, J. B. : *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*. Carl Winter, 1982

GENIUS English-Japanese Dictionary. 大修館書店、1988

LE PETIT ROBERT 1. 1991

Random House Webster's College Dictionary. 1991